

第4章 まとめ

羽鳥政彦編 1995 『小暮遺跡群 上百駄山遺跡・寺間遺跡・孫田遺跡』富士見村教育委員会
長谷川福次編 1996 『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教育委員会
矢口裕之 1998 「徳丸仲田遺跡」『年報』第17号 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

第6節 利根川の流路変遷と段丘の形成

白井遺跡群が位置する段丘面は、第2章第2節の地形の項目で記述したように、白井地区の地形区分図（第22図：25頁）で示されている白井面と呼称され、その形成は更新世の約1万年前とされている。

第154図は現在の白井地区の東西方向の断面図であるが、よく見ると分かるように、左の吾妻川側が最大で約30mのほぼ垂直に切り立っている絶壁であるのに対して、利根川側は浅田面と呼称される、白井面から約5m下の低位の段丘面が存在することから、左右（東西）は対称な形ではないのは明らかである。これは、利根川と吾妻川の流量や流れの速さなどの規模の違いによるものとも考えられ、上流域の利根川右岸に認められる段丘や、上位と下位の河岸段丘に大きく区分される利根川左岸である対岸側の赤城山西麓の地形のみならず、利根川と吾妻川の合流地点の上流部への移動に伴う、吾妻川右岸である渋川側の段丘形成にも影響をあたえていたと考えられる。

こうした要因が河川の浸食能力にも大きく影響し、形成時期が大きく異なる段丘の存在や、段丘崖の高さの違いなどを生み出したと言える。

本遺跡群が存在する白井面だけに限ってみても、西側にさらに古い時期の形成である長坂面が広がるのに対して、東側はさらに一段低い浅田面が利根川沿いに部分的に細長く存在する状態であり、利根川の蛇行する流路による浸食の様子がよく把握できる状況でもある。

現在の比高は、吾妻川とで約15m、利根川とでは約10mで、明らかに吾妻川側が高い。これは吾妻川の浸食が右岸の渋川側に及んでいたのに対して、利根川は蛇行を繰り返す中での対岸側との交互に及ぶ

浸食の中で、徐々に右岸の白井地区を侵食していたことを物語っている。

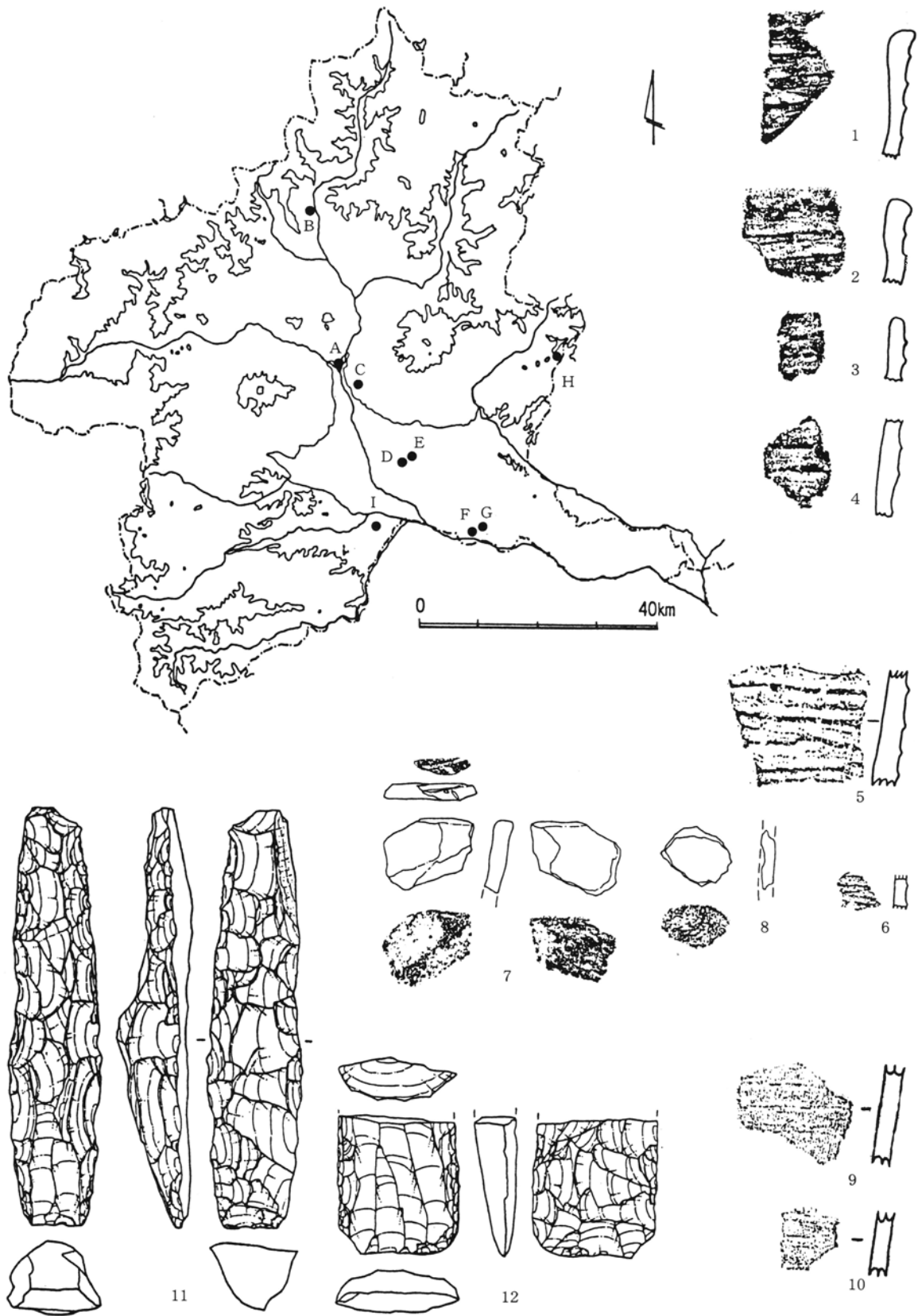
特に、小さな段丘崖の存在が、発掘調査を通じて白井北中道遺跡で顕著であり、隣接して西側に延びる国道353線の発掘調査に伴う白井北中道Ⅱ遺跡でも、同様の段差が確認されている。その比高は約1～2mであり、西側に一段高く広がる長坂面との間に何段も存在する。

また、現在の白井宿の東側にも「盗人道」と呼ばれる街並みと畠との間の南北の細い道が境となっており、その両脇で西側は一段高く、東側は一段低くなっている。こうしたことから、白井面の中でも細分が出来ると考えられる。

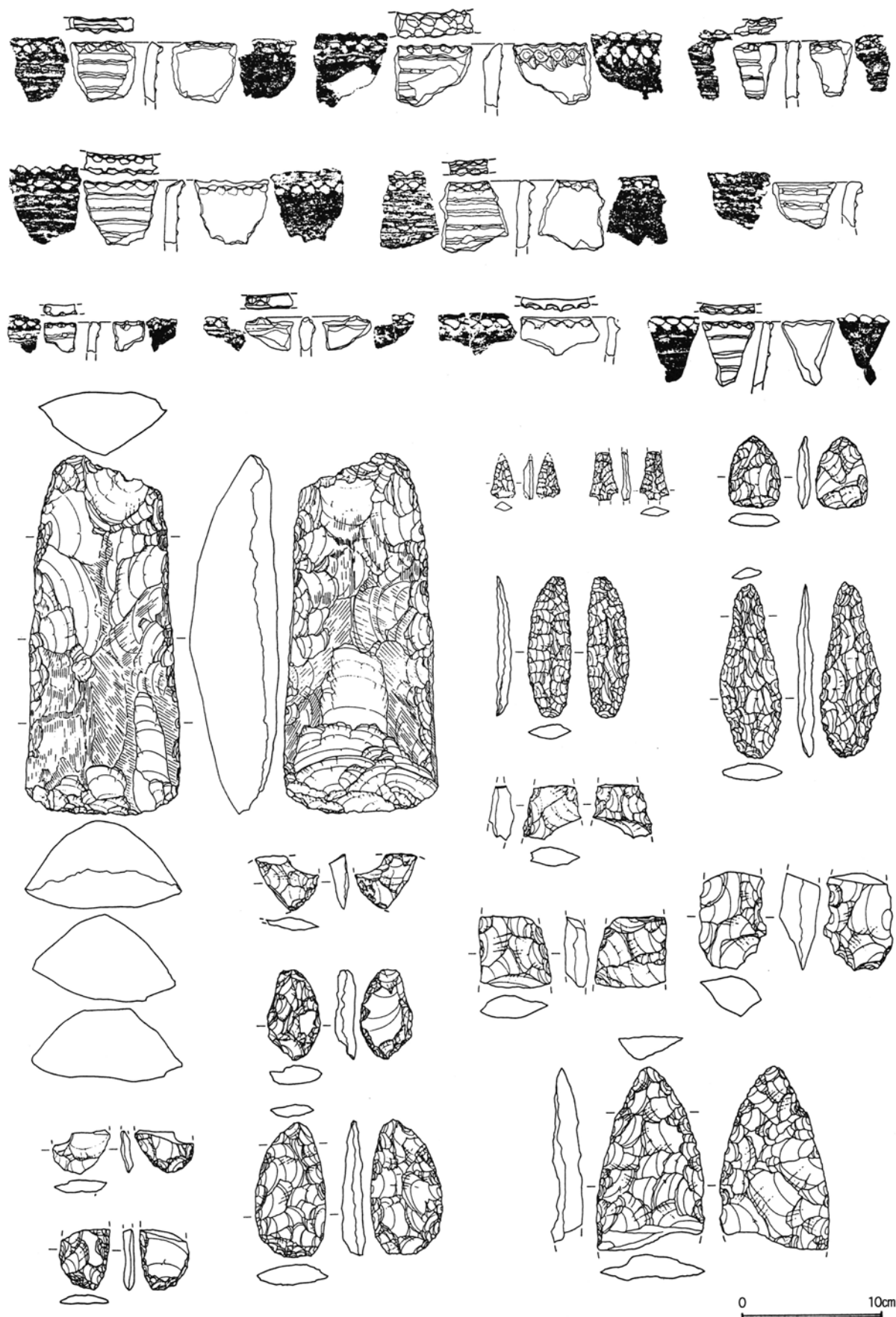
このような利根川の蛇行による段丘形成とは別に、離水時の短い周期での小河川の流れの移動が読みとれる可能性があるデータが存在する。ひとつは発掘調査中に実施した礫層までのトレンチによる基本土層の確認調査での礫層とローム層、ローム漸移層の上面の標高値を比較することで、こうした微高地と低地の部分の確認をして、平面に見える現地形の下の凹凸の流れを読みとることが可能となる。これを調査区域内全面のデータを書き込んだものが、第156図と第157図である。

もうひとつは縮尺の大きい都市計画図のような地図上での標高ラインの流れの読み取りを通じて、段丘面の微妙な凸凹を詳細に追うことで、旧河道の復元を試みることにした。それを示したのが第155図である。遺跡群が存在する白井面の上に、白井宿の街並みとほぼ平行な形で幾筋もの流れの跡と考えられる低地が帯状に認められることから、それを旧河道として矢印で示した。現時点では4本程度が考えられるが、今後の周辺での発掘調査などによる検証で確認されることを望む。

一方、赤城山の裾野の南西部に位置する利根川左岸の赤城村宮田・樽地区から大正橋北の北橋村船戸にかけては、ほぼ南北に細長い形で沖積世（完新世）の河岸段丘が存在する。大正橋から板東橋の間の分郷地区にかけては洪積世（後新世）の河岸段丘が存



第152図 県内主要縄文時代草創期遺跡位置図、出土遺物図



第153図 小島田八日市遺跡出土遺物図

在する。前者には黒ボク土以後の堆積土が、後者には上部ローム以後の堆積土がそれぞれ認められる。

また、利根川の寝食により形成された比高約70m以上と規模が大きい段丘崖の上位には赤城山の裾野に東西に細長く延びる段丘面が南北を小河川により区切られる形で広がっており、そこにはいくつもの広域テフラを含む下部～上部ロームから黒ボク土までの堆積土が認められる。赤城山の新期成層火山形成の時期の溶岩流とテフラを中心に構成されている露頭を所々で見る事が出来る段丘崖が障害となり、利根川の寝食がむしろ子持村側の子持山の東麓に及ぶことが多くなり、その結果として何段もの河岸段丘を作り出すと共に、それぞれの形成期間の短さが段丘崖の高さをそれぞれ低くしたものと考えられる。

赤城山の形成そのものについては、守屋氏らによる研究が進められており、現在では赤城山の活動の始まりは約40～50万年前と考えられている。

一方、吾妻川右岸の渋川側は、榛名山の裾野の北東部にあたり、川島地区から金井地区にかけてほぼ北西～南東方向の細長い形で沖積世（完新世）の河岸段丘が存在する。だが、こちらは吾妻川の浸食能力が利根川に比べて低いのか、子持村北牧地区の段丘崖もその比高が約10m未満とやや小規模に形成されており、右岸の段丘面も数が少なく、幅が広いことから形成の規模が小さいことが言える。ここは長い期間氾濫原となっていたために、天明3年(1783)7月8日（旧暦）の浅間山の噴火に伴う泥流が押し

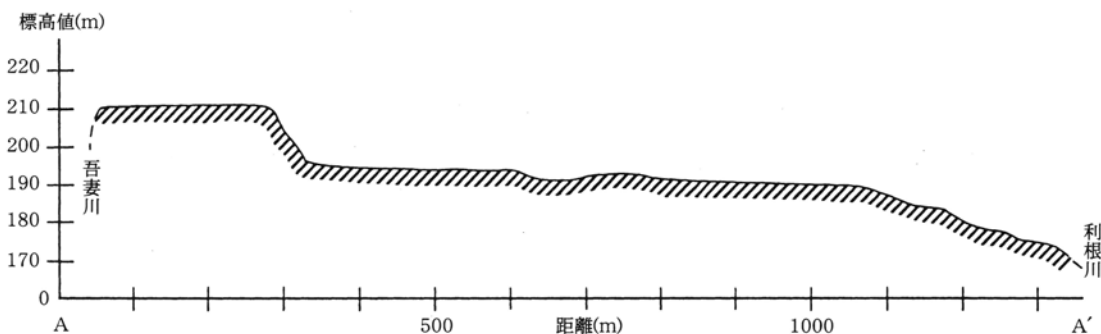
流されてきた両輝石安山岩である浅間岩を含めて5m前後と厚く堆積している。

渋川市街地にみられる唐沢川沿いの唐沢泥流堆積物や6世紀代の二度にわたる二ッ岳軽石流堆積物が扇状地状に堆積している。前者については山体崩壊が原因と考えられている。その時期は上部ロームが堆積していないことから、上部ローム堆積以後で二ッ岳軽石流堆積物の堆積以前と考えられている。これらの堆積物が見られない本来の榛名山の裾野部分からは、旧石器時代や縄文時代早期・前期の遺跡が存在することから、おそらくは、堆積物の下位には同様に旧石器時代から縄文時代の古い時期の遺跡や遺物が眠っている可能性が高い。

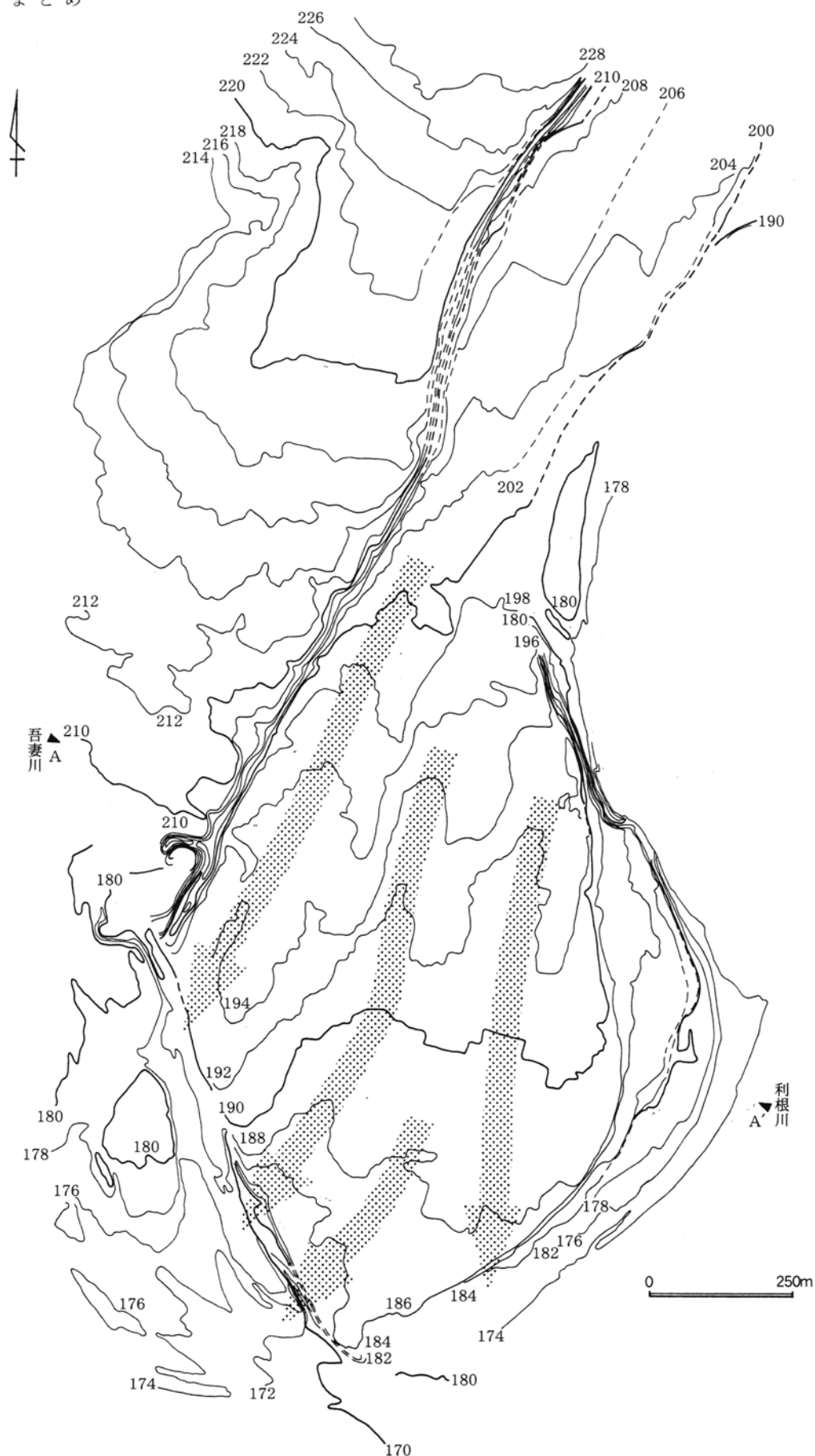
なお、榛名山の形成についても、同様に研究が進んでおり、その活動の始まりは少なくとも約30万年以前と見られている。

参考文献

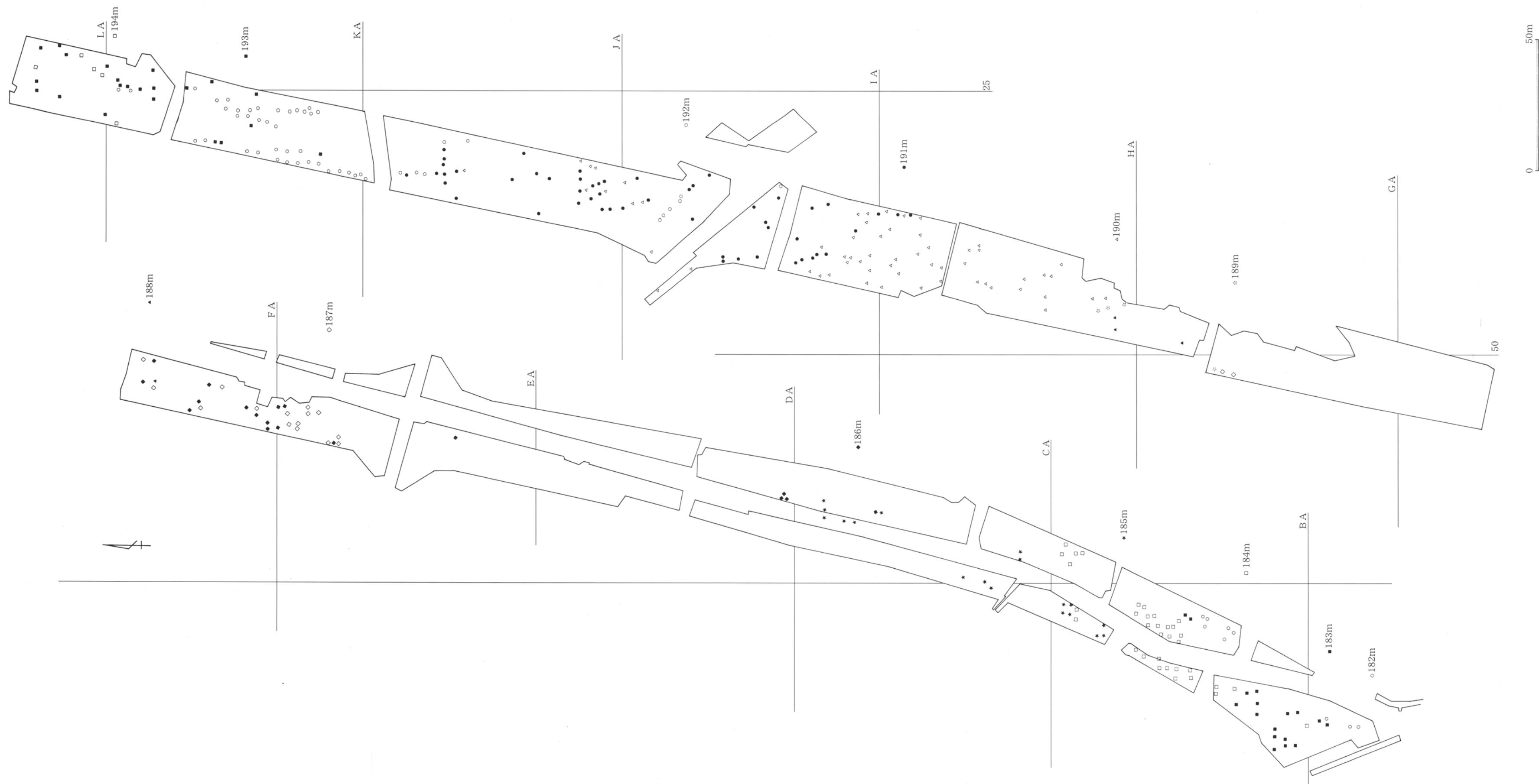
- 沢口 宏 1975 『北橘村誌』北橘村
- 山口尚志 1981 「武尊火山の地質」『地質学雑誌』第87巻12号
- 久保誠二 1987 『子持村誌』子持村
- 萩原 哲 1987 『渋川市史』渋川市
- 早田 勉 1990 『群馬県史 通史編1 原始古代1』群馬県



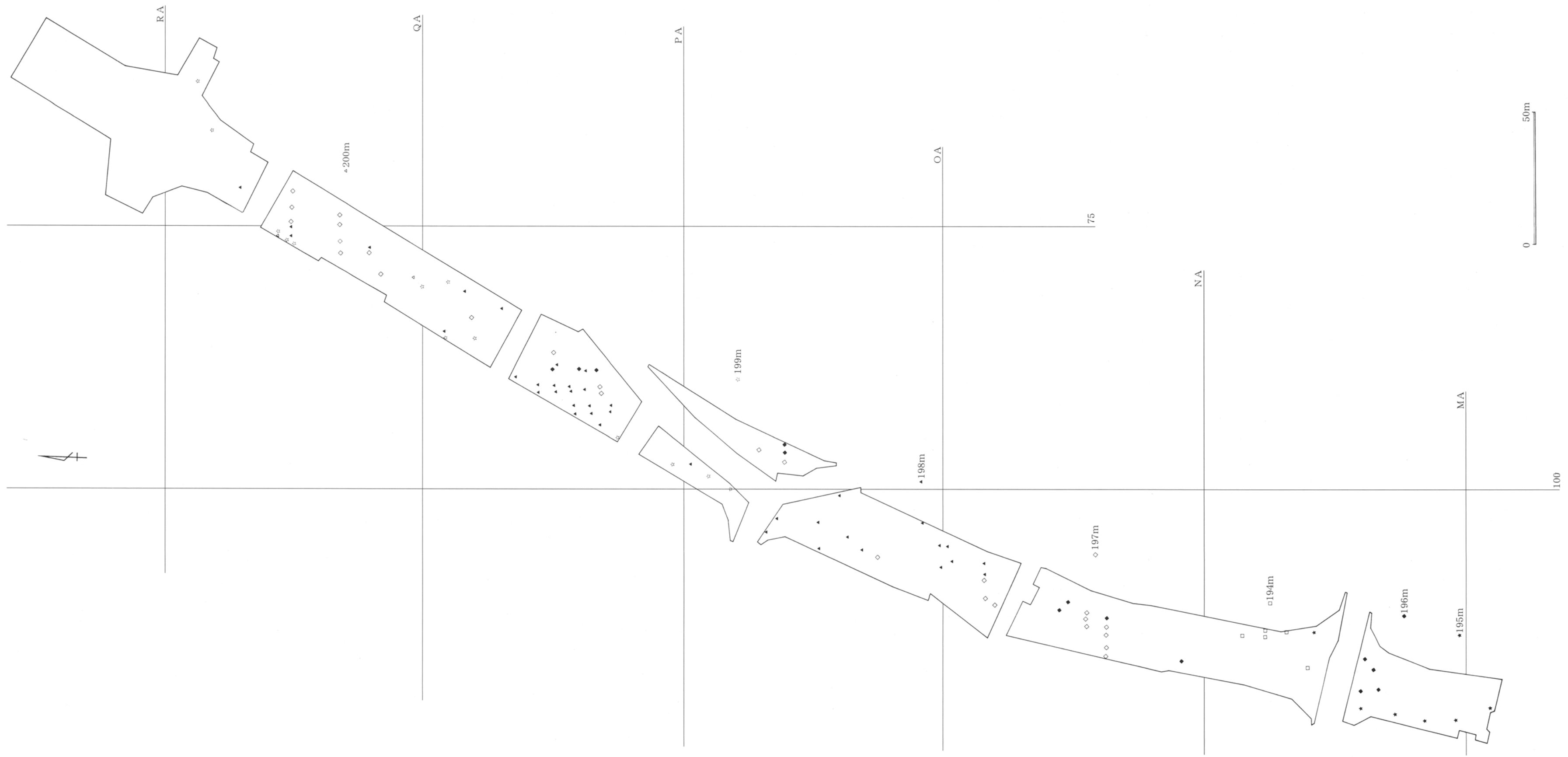
第154図 河岸段丘（白井面）の断面図（第155図のA—A'ライン）



第155図 河岸段丘（白井面）の微地形平面図（利根川流路の変遷復元）



第156図 白井遺跡群礫層上面の標高値による微地形復元（1）



第157図 白井遺跡群礫層上面の標高値による微地形復元（2）

